

古典文学にみる日本の素晴らしさと…

“たづね見るつらき心の奥の海よ 潮干の潟のいふかひもなし “

『新古今集』恋四・1332番 藤原定家

この和歌の現代語訳は、「たづねてみる、恋人のつれない心の奥の海よ。そこは潮の引いた乾ききった潟で、貝の一つもない。私に対する思いの涸れ果てたあなたの心には、何を言う甲斐もない」であります。

「かひもなし」は「甲斐もなし」と「貝もなし」の掛詞。

「つらき心の奥の海」には「あなたのつれない心の奥」と「おくの海」という実際の地名が重ねられています。

さらに、この歌は「源氏物語」の夕顔の物語で「六条わたり（六条近くに住まう女の所）」として登場する六条御息所が詠んだ和歌（次第に疎遠になっていく光源氏への苦悩と別れの和歌）を踏まえており、貝さえもない荒涼とした海辺の景色に何を言っても仕方がないほどすっかり愛の冷めた相手の心を重ね合わせることで、一層乾いた諦めの念を描いています。

藤原定家。まさに天才としか言いようがありません。

古典文学の素晴らしさを垣間見るとともに、こうした歴史と文化を持ち合わせている日本という国に誇りを感じるのであります。

とはいえ、現代という俗世を生きる一親父としては不敬にも、こうも思うのであります。

「女たらしの光源氏が、またしても女心をもてあそびやがって…」
チクショー！とか、「貝もなし」と「甲斐もなし」って…これは親父ギャグの元祖じゃね!! （失礼）

実は、この藤原定家が詠んだ和歌は、7月8日付け朝日新聞の17面「探求」のコーナーに掲載されていたものです。

先に文部科学省から示された高等学校の新学習指導要領では、従来の「総合的な学習の時間」に代えて、「総合的な探求の時間」を設けることとされています。

これまで学校では主に「知識」や「技能」を学ばせてきましたが、グローバル化や情報化の進展など我が国を取り巻く諸情勢の変化や社会の要請もあり、これらの「知識・技能」に加えて、自ら課題を発見し、解決策を考えていく「思考力・判断力・表現力」、さらには他者と協力しながら課題を解決していく「主体性・多様性・協調性」なども育成するよう求められています。

そのためには、まず生徒一人ひとりが、どんなことでもいいから何かに興味を持つことが大切だと思います。

何かに興味を持ったら、それをとことん追求して極めていく姿勢が、次第に探求の力となっていくのではないのでしょうか。

新しい「総合的な探求の時間」がそんな時間になるよう考えていこうと思っています。

今回の藤原定家の和歌が、興味的一端につながれば幸いに思います・・・。

※経済活動が活発になるに従って、新型コロナウイルスの感染が再び拡大することが予想されています。

皆様くれぐれもご自愛ください。